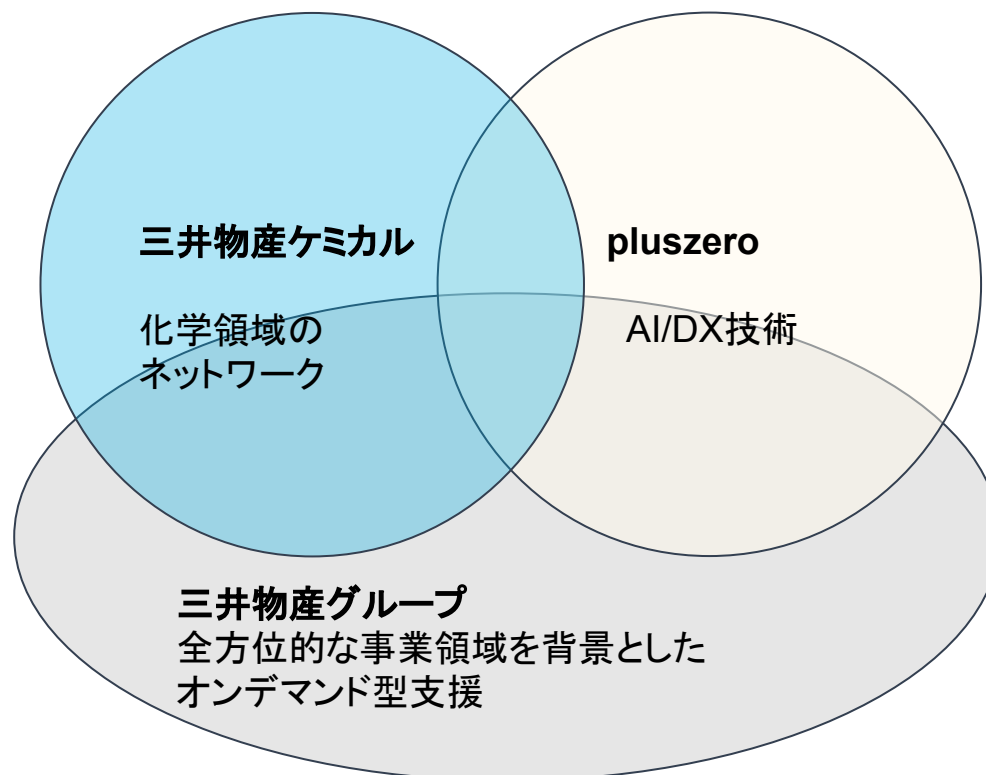


背景

DXを支援する機能を持つ企業は国内ではごく一部の地域に集中
多くの企業は未だ昨今の急速なテクノロジー進化の恩恵を受けづらい環境

概要

pluszeroが持つ数多くのAIやITシステムの開発、導入、コンサルティング経験から蓄積された、DXの成功パターン、適切な導入順序、内製・外注の判断基準、ベンダーとの協働方法などの知見と、三井物産グループの広範囲に渡るネットワークを組み合わせることで、日本全体の持続的成長、アップデートに取り組むことに合意



例えば以下のような悩みを抱える企業やご担当者を想定

- ・成長のための新しい技術の導入を模索しているが、具体的な戦略や技術選定ができていない
- ・情報が不足しており、デジタル技術の恩恵を受ける方法が分からない
- ・革新的なアイデアを持つが、リソースや知識の限界からDX戦略の実行に苦戦している
- ・DXプロジェクトにアサインした(された)が、専門知識や経験が乏しく、プロジェクトの進行に自信がない
- ・DXをリードしたいが、どの技術がビジネスに最適か判断が難しい
- ・技術的なバックグラウンドはあるが、最新のDXトレンドやツールの選定、チーム内でのDXスキルの向上方法について学びたい

地域としては先行して近畿・九州地域で現在展開中

DXコンシェルは企業のDXの実現を妨げる様々な障壁を取り除くための複合的なサービス

対応可能な課題とサービス

1 ・そもそも自社にとってのDXの有効性が分からない



1. DX診断

貴社に対しヒアリングを実施し、DXの必要性の有無や具体的な方策をレポート
DXが有効な場合、コストパフォーマンスの良い施策を立案可能

2 ・社内で理解が得られない
・発注の仕方が分からない



2. DXワークショップ

DXを推進していく上での重要なポイントや注意点を網羅的に分かりやすく解説するものや、発注者としてのリテラシーを高めるためのものなど、ニーズに合わせて柔軟に設計して提供

3 ・社内に推進役がない
・困った時に助けがいない



3. DXコンサルティング

貴社のことをよく理解したスタッフがDXの検討から浸透までをサポート
弊社営業時間中であればいつでも対応
(履歴管理のためチャットによる対応を基本に、必要に応じて通話)

DX導入検討の初期に以下の要素を含むレポートを提供

「現状把握」

「弱点や課題の特定」

「投資対効果の判断に資する導入時の費用感の提示」

DX推進の度合いと得られるメリット

デジタルデータ化

- ✓ 情報管理や処理の効率化
- ✓ 共同作業、共同編集の実現
- ✓ セキュリティ強化
- ✓ 属人的作業の解消
など

データの可視化

- ✓ 意思決定の支援
- ✓ 複雑な関係性の把握
- ✓ 異常やパターンの発見
- ✓ ノウハウの形式知化
など

RPA導入 (Robotic Process Automation)

- ✓ 業務効率やコストの改善
- ✓ 働き易さ、働き甲斐の向上
- ✓ ヒューマンエラーの低減
- ✓ 24時間の稼働体制構築
など

AI導入

- ✓ 業務効率やコストの最適化
- ✓ 新規顧客層の獲得
- ✓ ロボットの活用
- ✓ 新規事業の創出
など

企業ごとの課題に合わせて個別に設計したワークショップを開催

DX入門講座

ChatGPT活用講座

発注者リテラシー向上講座

など

DXに関する誤解

経営と現場のDXの認識の違い

	経営陣が求めるインパクト	現場が見つけるターゲット
視点	企業全体の戦略的視点からDXを捉え、市場における競争優位性の確立、新たなビジネスモデルの創出、長期的な成長機会の探索など、大きなインパクトを期待。	日々の業務プロセスや課題に直面しており、その解決や効率化をDXの主なターゲットと見なすことが多い。これらは具体的で実務的な範囲に限定される。
アプローチ	新しい技術を活用してビジネスモデル自体を変革し、業界のルールを変えるような革新的なアプローチを求める。	業務の効率化や生産性の向上を通じて、短期間で目に見える成果を求める。これには、特定のプロセスの自動化やデータ管理の改善などが含まれる。
スコープ	DXを通じて、企業文化の変革や組織構造の見直しなど、全社的な変化を目指す傾向がある。	特定の部署やチーム内の業務改善に焦点を当てることが多く、企業全体の変革よりも局所的な変化を目指すことが一般的。

要件定義とは何をする工程か

- 以下の項目を埋めていく工程

プロジェクト要件	前提条件	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 解決する課題はなにで、価値を受け取る主体は誰か ✓ 参考にできる過去の知見はあるか、有識者はいるか ✓ 各社各部門の管掌範囲はどこまでか 	
	AIシステムの位置付け	<ul style="list-style-type: none"> ✓ なぜAIを使うのか、AIシステムはプロジェクトの中でどんな役割を担うのか ✓ AIシステムは差別化ポイント、競合優位性をどのように生み出すか 	
	達成条件	<ul style="list-style-type: none"> ✓ プロジェクトやシステムの成果の評価指標と計測方法はなにか ✓ 目標とする水準、システムとして最低限必要な水準と実現可能性はどれくらいか 	
システム要件	機能要件	Input	<ul style="list-style-type: none"> ✓ なにをデータとして集めるか ✓ どのようにデータを集めるか(どんな量・質のデータが集まる見込みか) ✓ 転用できるデータはないか
		Process	<ul style="list-style-type: none"> ✓ モデルはルールベース向きか機械学習向きかハイブリッド向きか ✓ モデルの説明可能性はどのレベル、どの性質のものが必要か
		Output	<ul style="list-style-type: none"> ✓ なにをユーザーに届けるか(出口として提案できるソリューションはなにか) ✓ どのようなユーザーインターフェースを採用するか
	その他	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 運用の中で更新・改善していくモデルか、またしていく場合その方法は ✓ 機能が複数ある場合の優先順位は 	
	非機能要件	<ul style="list-style-type: none"> ✓ セキュリティ要件はなにか ✓ スループットやレイテンシの要求水準はどれくらいか ✓ システム環境(開発環境、学習環境、推論環境を含む)はどのようなものか ✓ その他可用性・拡張性・保守性・移行性について必要に応じて決定・仮定する 	

検討から導入・浸透に至るまで、DX実務を知り尽くした貴社専任のスタッフが伴走しながらサポート

■ コンサルティング事例



■ 対応可能な事業領域

